小学校体育授業において集団性が子供の運動有能感に及ぼす影響

－エンゲストロームの活動理論に依拠して－

堀田愛　（　筑波大学大学院　）

1. 目的

本研究の目的は、小学校体育現場において、運動有能感の低い子供に影響を及ぼす集団性を明らかにすることと、エンゲストロームの「活動システム」を理論的枠組みとして有益な関わりを促進するために必要な教師の働きかけを示すことである。

2. 研究方法

1) 対象者：小学校６年生１クラスの児童 37 名と担任教師１名

2) 調査方法：小学生用運動有能感アンケートを３回実施した。事前の結果から、運動有能感が最も低かった児童２名（A 児、B 児）に着目して、4 ヶ月間エスノグラフィーの手法を用いた参与観察を行った。

3) 分析方法：運動有能感アンケートの結果をもとにした因子別平均と合計得点を、事前、中間、事後間で比較し、学級全体と女子、男子についてはそれぞれ一元配置の分散分析を行った。

3. 結果と考察

1）運動有能感アンケートについて

運動有能感合計得点について、学級全体の平均値は、事前が 2.83±0.35、中間が 2.84±0.37、事後が 2.77±0.34 であり、変化量に有意差は認められなかった（F(2,70)=2.158,n,s.）。その一方で、A 児の得点は調査期間全体にかけて上昇傾向が見られ、B 児の得点は期間前半に上昇傾向、期間後半に下降傾向が見られた。

2）運動有能感が向上した要因について（図１）

バスケットボールの単元の事例では、A 児がシュートを決めた際のチームメイトの反応に変化が見られた。そこでは、教師は A 児を賞賛した児童に対して FB を行っており、学級内で賞賛することの価値が共有されていたことが活動システムの変容に繋がり、A 児の運動有能感の向上に影響したと考えられた。

3）運動有能感が低下した要因について（図２）

投の運動の単元では、教師が複数人で解決する課題を設定したが、B 児は一人で課題に取り組んだため、活動システム内の「ルール」との間に矛盾が生じた。その背景には、これまでの単元での自らの働きかけによる相互作用の不成立経験が考えられる。同時期に相互作用成立経験をした A 児との比較や、外山・水落（2015）の研究からも運動有能感が低い子どもにとっての相互作用の重要性が示された。

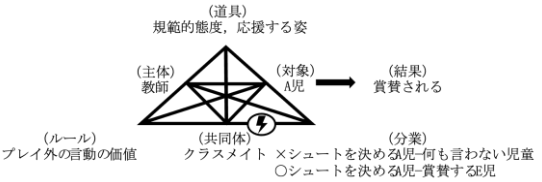

図１ 運動有能感向上例の「活動システム」

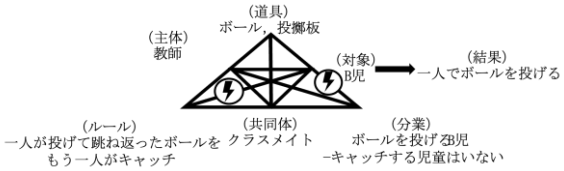

図２　運動有能感下降例の「活動システム」

4. 結論

本研究では、運動に自信のない児童の運動有能感を向上させるためには、応援や賞賛などプレイ外の言動にも価値を見出すような集団の在り方と、そのような言動に対して教師が FB を行う指導方略の有効性が新たに示された。

5. 主な参考文献

1) Engeström, Y. (1999) Expansive visibilization of work:An activity-theoretical perspective. Computer Supported Cooperative Work (CSCW), 8:63-93.

2) 堀田愛・高橋達己・齊藤まゆみ・澤江幸則 (2023) 運動の苦手な子供における効果的な指導方法について：メタ分析を用いた検討. 体育学研究, 68：103-116.